

# 鎌倉時代における『源氏物語』の書写態度

——空蟬巻における陽明文庫本と玉里文庫本を通して——

新 美 哲 彦

一 はじめに

文学作品を書写する際、その書写態度というものは、時代や作品のジャンルによって、どのように異なるものなのだろうか。

「能書の家」について考察した高橋英樹が、定家の「平生所書之物、以<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>落字<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>惡筆<sub>一</sub>之<sub>一</sub>得<sub>一</sub>」（『明月記』寛喜三年八月十八日条）という言と、伊行の書写態度に対する「伊行落<sub>一</sub>司字<sub>一</sub>入<sub>レ</sub>傍、問<sub>一</sub>其由<sub>一</sub>之<sub>一</sub>処、陳曰<sub>一</sub>一字<sub>一</sub>二字<sub>一</sub>入<sub>レ</sub>之、至于<sub>一</sub>三字<sub>一</sub>以上<sub>一</sub>不入<sub>レ</sub>之、是父祖所伝之故実也」（『台記』久寿二年四月二十七日条）という言を比較し、「正確な書写こそが典籍書写の本質であり、それは、室町時代になっても変わっていないのである」<sup>①</sup>「正確性をないがしろにする「能書の家」による書写は、良質のテキスト作成とは相容れなかった」と述べる<sup>②</sup>ごとく、「能書の家」と定家では、まったく異なる書写態度を見せる。だが、高橋英樹が「正確な書写こそが典籍書写の本質である<sup>③</sup>」ることの例として挙げた定家も、歌集類の書写に際し、「不違一字」的書写態度の由来や意味を論

じた浅田徹が述べるごとく、「なにの証本をももちゐず」（『顕注密勘』）と、「不違一字」的書写態度ではない。<sup>④</sup>

作り物語の書写においても、その作品に対する書写態度は異なるようで、諸本によって、物語内の歌数が十数首から百首以上までと大幅に揺れ動く『住吉物語』や、異同が激しい『狭衣物語』と比べて、『源氏物語』は、現存する写本の数や、享受史の厚さにも関わらず、奇跡的と言つてよいほど、異同が少ない。これにはさまざまな要因が考えられようが、『源氏物語』が他の作り物語に比して、（親本もしくは祖本に対して）比較的厳密な書写態度で書写されてきたことが、直接の要因として考えられよう。

では、『源氏物語』の書写は、いつごろから（親本もしくは祖本に対して）厳密になったのだろうか。また、現存写本の最も古い書写時期に当たる鎌倉期において『源氏物語』を書写する際の書写態度はどのようなものであったのだろうか。

本稿では、特異な本文を有することと有名な、いわゆる別本の陽明文庫本『源氏物語』のうち、従来河内本との関係を指摘され

ている空蟬巻を取り上げて検討したい。

## 二 空蟬巻の陽明文庫本と第二類（非旧河内本系）

今回対象とする陽明文庫本『源氏物語』は、「鎌倉時代中期の書写とみられている三十四帖を基幹とするもので、この諸帖の本文は青表紙本でも河内本でもない別本とみなされている。これに、鎌倉時代後期乃至は吉野時代にかかるころの書写かとみられている諸帖（別本五帖、青表紙本十二帖）と、江戸時代（寛永―寛文ごろか）の補写本三帖（青表紙本系統）とを加えて五十四帖を構成している<sup>③</sup>」もので、空蟬巻は「最も基幹的諸帖二十八帖の中の<sup>③</sup>」とされる。

また、下記の先行諸論で対象とされる「河内本」とは、『源氏物語大成』所収河内本系諸本の校異である。なお、定家が作成したとされる「青表紙本」と従来「青表紙本系」として分類されている諸本ほどの問題は有さないものの、光行・親行作成の「河内本」と、従来「河内本系」として分類されている諸本がイコールである保証はない。よって、以下では、光行・親行が書写・作成した本文については「河内本」を、従来「河内本系」として分類されている諸本については「第二類（非旧河内本系）」を用いる。また、従来「青表紙本系」として分類されている諸本については「第一類（非旧青表紙本系）」と呼ぶ。

空蟬巻における陽明文庫本と第二類（非旧河内本系）諸本の関係については、すでに五島和代と伊東祐子<sup>⑦</sup>に考察がある。いずれも吉岡曠「河内本『桐壺』巻の校訂過程」<sup>⑧</sup>の強い影響下に書かれた

論である。

吉岡論の手法とは、河内本が校訂本であること、別本が河内本以前の本文を遺していること、を論の前提として、『源氏物語大成』所載の別本のうち、第二類（非旧河内本系）に最も近い本（の祖本）を河内本の底本と認定する手法である。

五島、伊東も同様に、『源氏物語大成』空蟬巻所載の別本である、陽明文庫本、飯島春敬本、麦生本、阿里莫本、桃園文庫蔵本の五本と第二類（非旧河内本系）諸本の異同を丹念に比較する。そして、五島は「以上をまとめると、河内本空蟬・末摘花の巻は、大成の諸本中陽明文庫本に一番多く近似しており、それは河内本が陽明文庫本系統の本文を下敷にしたからであるということにな<sup>⑥</sup>」と述べ、伊東も「空蟬巻に関しては、陽明文庫本（祖本）が河内本の底本的本文であった蓋然性が非常に高いことが判明したといえるだろう<sup>⑦</sup>」と結論づける。

果たして、諸本が生成する過程というのは、それほど単純なのだろうか。

吉岡論以下三氏の論の問題点は、1、河内本は校訂本である2、別本は河内本以前の本文を遺す3、写本の本文は「誤写」「合成」のみで生成される、ということ論の暗黙の前提にする点にある。前提1・2によって、河内本は校訂本文であるから、後から作成されたもので、別本は河内本以前の本文を遺すから、別本の中から第二類（非旧河内本系）に近い本文を探せば、それが河内本の底本（的本文）である、という思い込みが発生する。加えて、写本の本文は「誤写」「合成」のみで生成されるわけでは

なく、書写者が独自異文を作り出していく場合や、「誤写」を発端としてその「誤写」を合理的本文に変更していく場合など、さまざまなパターンが考えられる。

詳細は省くが、実は、三氏の検証から導き出せるのは、陽明文庫本（吉岡論の場合は麦生本<sup>(9)</sup>）と第一類（≠旧河内本系）が近接した関係にあるらしい、ということのみで、先後関係を言うこととはできない。そもそも、二種類の本文の比較だけでは、誤写なのか誤写の訂正なのか、欠脱なのか増補なのか確定することはできず、先後関係を決定することは困難である。

### 三 玉里文庫本の本文

ここに、陽明文庫本と近似する本文を有する写本が存在する。鹿児島大学玉里文庫蔵古筆源氏物語（天337361・玉里文庫本<sup>(10)</sup>）である。空蟬巻の推定書写時期は「鎌倉時代より南北朝の頃まで」とされており、伝承書写者は「世尊寺行房卿」（伝筆者一覽表に拠る）である。行房は生年未詳、延元二年（一三三七）三月六日没。

空蟬巻の異同数を「源氏物語大成」と比較した徳満澄雄が「陽明家本及び桃園文庫本に対してもかなり相違点が存するので、玉里文庫本は両本よりも尾州家本に近い別本の一種とみるべきであろう<sup>(11)</sup>」と述べ、伊牟田経久が「陽明家本は河内本に近い関係にあり、桃園文庫本は青表紙本への近よりを見せ、玉里文庫本は陽明家本と桃園文庫本との中間にあるということになろう<sup>(12)</sup>」と述べるように、別本ということは判明するものの、異同の数のみの処理では、位置づけが判然としない本文である。

独自に、陽明文庫本、玉里文庫本、第一類（≠旧青表紙本系）、第二類（≠旧河内本系）の四種の本文で比較した異同数を挙げると表1のようなになる。

表1・異同の数

※全体の語数は大島本を語単位に区切った後、大島本にはない他本の本文の語数も加えたもの。異同数は語数で数えた。参照した諸本数だが、陽明文庫本、玉里文庫本はそれぞれ一本、第一類（≠旧青表紙本系）は二本、第二類（≠旧河内本系）は三本。「陽明文庫本と第一類の異同数」は、陽明文庫本と一致する本文を第一類が一本も有さない語の数の総計である。厳密な意味を持つ数値ではなく参考程度の数値である。

全体の語数2303	異同数
・陽明文庫本と第一類の異同数（陽／一）	432
・陽明文庫本と第二類の異同数（陽／二）	208
・玉里文庫本と第一類の異同数（玉／一）	404
・玉里文庫本と第二類の異同数（玉／二）	193
・陽明文庫本と玉里文庫本の異同数（陽／玉）	303

異同数のみで見ると、陽明文庫本と第二類（≠旧河内本系）（異同数208）、玉里文庫本と第二類（≠旧河内本系）（異同数193）との近似は了解されるものの、陽明文庫本と玉里文庫本の間には異同数が多く（異同数303）、やはり近似しているようには感じられない。これは異同数のみで本文の近似を探る時の落とし穴であり、陽明文庫本、玉里文庫本双方に独自異文が多いことが原因である。そ

ここで異同数から独自異文数を除いた数値を挙げると表2のようになる。

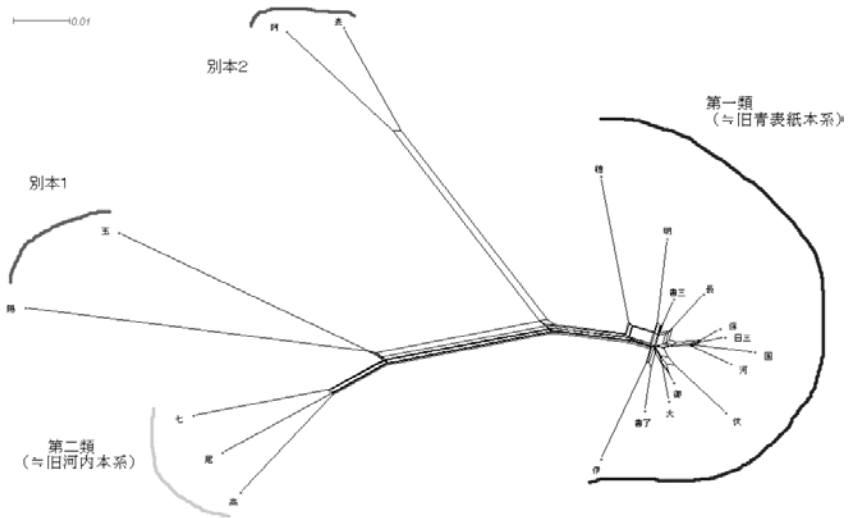
表2

全体の語数2503	独自異文を 除いた数値
・陽明文庫本と第一類の異同数(陽/一)	305
・陽明文庫本と第二類の異同数(陽/二)	81
・玉里文庫本と第一類の異同数(玉/一)	295
・玉里文庫本と第二類の異同数(玉/二)	84
・陽明文庫本と玉里文庫本の異同数(陽/玉)	7

陽明文庫本と第二類(≠旧河内本系)(異同数305)、玉里文庫本と第二類(≠旧河内本系)(異同数84)よりも、さらに陽明文庫本と玉里文庫本との異同数は少なく(異同数7)、双方の本文が近似することが数値の上でも了解されよう。

なお、図1に示すごとく、生物系統学で使用されるプログラムにおいても、第二類(≠旧河内本系)と陽明文庫本、玉里文庫本が近い関係にあること、陽明文庫本と玉里文庫本がより近い関係にあることが確認される<sup>(12)</sup>。

図1 Neighbor-Net network (Bryant and Moulton 2004)



四 空蟬巻の第二類（非旧河内本系）と別本

実は、『源氏物語大成』に校異が採られている桃園文庫本、島春敬本も、異同を見る限り、陽明文庫本、玉里文庫本と近い本文を有しているようである。以下に、陽明文庫本と玉里文庫本に共通の特徴的な異文を、他本の本文とともにいくつか挙げる。

陽明文庫本と玉里文庫本に共通の特徴的な異文

※陽明文庫本を「陽」、玉里文庫本を「玉」、桃園文庫本を「桃」、飯島春敬本を「飯」、第一類を「一」、第二類を「二」と略称で示した。

例一・陽玉「こきみかいりつるかうしを」

飯 「こ君はいりつるかうしを」

桃 「こ君のいりつるかうしは」

一 「このいりつるかうしは」

二 「このいりつるかうしを」

例二・陽 「さはらかにてかたのほといときよけに」

玉 「さはらかにかたの程いとよきよけに」

一 飯桃 「さかりはかたのほときよけに」

二 「さかりはかたのほといときよけに」

例三・陽玉飯桃「ねたりけるを」

一一 「ねにけり」

例四・陽玉「いとよくまどろみたり」

飯桃 「いとよまどろみたり」

一一 「いとよまどろみたるへし」

例五・陽 「もたけてみるに」

玉飯「もたけてみるに」

桃 「もたけて」

一一 「もたけたるに」

例六・陽桃「す、しなるひとへのおともせぬをきて」

玉 「す、しなるひとへのをとせぬをきて」

飯 「す、しなるひとへをきて」

一 「す、しなるひとへをつきて」

〇二 「す、しなるひとへ一つをきて」

二 「す、しなるひとへひとつきて」

例二の桃園本、飯島本、例五の桃園本、例六の飯島本を除けば、一見して陽明・玉里・桃園・飯島本が特徴的な異文を共有していること（祖本を共有するグループであること）が了解されるだろう。これら四本のうち、桃園文庫本は書写年次が不明だが、他の三本は鎌倉期から南北朝期の書写とされており（飯島本は存疑<sup>14</sup>）、鎌倉期から南北朝期にかけてこのグループの本文がある程度流通していたことを伺わせる。空蟬巻においては、左図のごとく、おそらく、陽明・玉里・桃園・飯島本などが属する本文グループの影響を受けて、第二類（非旧河内本系）が成立したのである。

従来の説（空蟬巻）

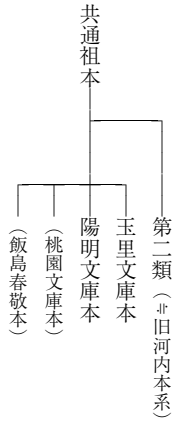
陽明文庫本——第二類（非旧河内本系）

関係性が低い・桃園文庫本

・飯島春敬本

・（玉里文庫本）

新たに判明した関係（空蟬巻）



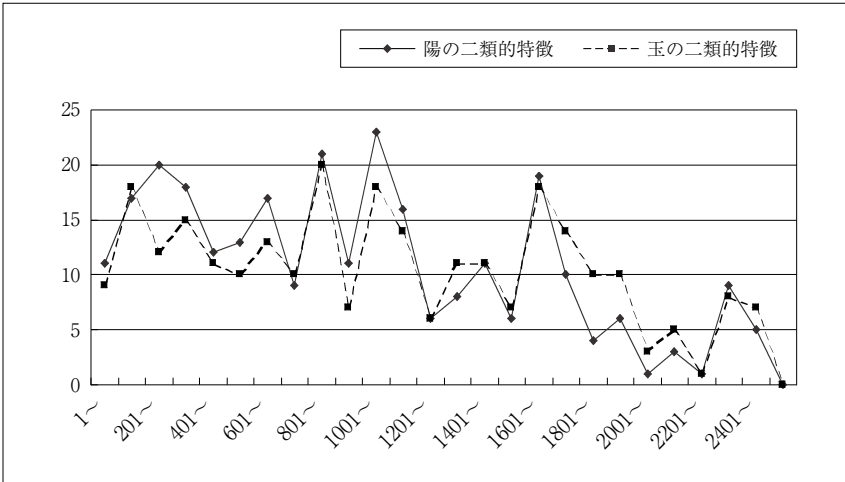
## 五 空蟬巻の陽明文庫本と玉里文庫本

だが、陽明・玉里・桃園・飯島本は、第三節表2や『源氏物語大成』の異同によって了解されるごとく、それほど緊密なグループを形成しているようには見えない。では、これらの諸本は、どのような書写態度のもとに成立したのだろうか。原本および影印で確認できる陽明文庫本と玉里文庫本の、空蟬巻における本文的特徴を次に見ていきたい。

グラフ1は第二類(旧河内本系)的特徴で、三節でも見たごとく、陽明文庫本と玉里文庫本に相関関係があり、第二類(旧河内本系)に近い本文を有することが知られる。

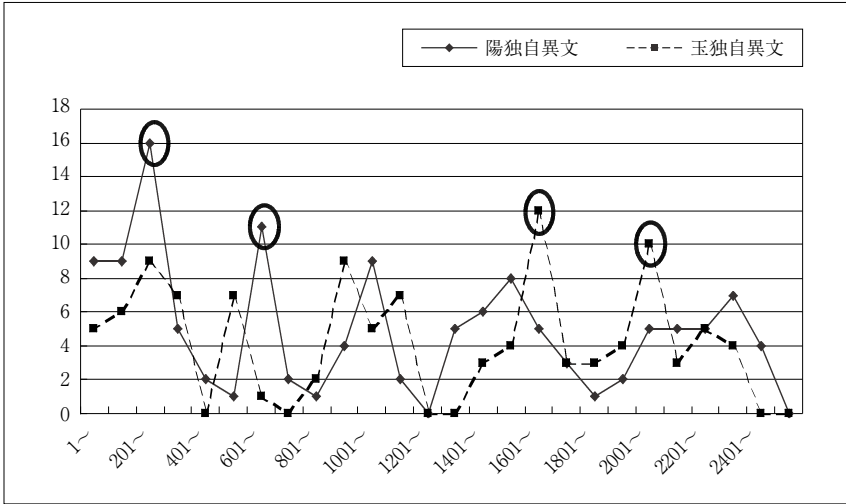
興味深いのは、独自異文を示したグラフ2と、第一類(旧青表紙本系)的特徴を示したグラフ3である。グラフ2では、巻の前半に陽明文庫本の独自異文が多く、巻の後半に玉里文庫本の独自異文が多い。グラフ3では、独自異文とは逆に、巻の前半に玉里文庫本の第一類(旧青表紙本系)的特徴を有する本文が多く、巻の後半に陽明文庫本の第一類(旧青表紙本系)的特徴を有する本文が多い。しかも、玉里文庫本で第一類(旧青表紙本系)的特徴となる文が、陽明文庫本で独自異文になる、というような対応

グラフ1 第2類の特徴

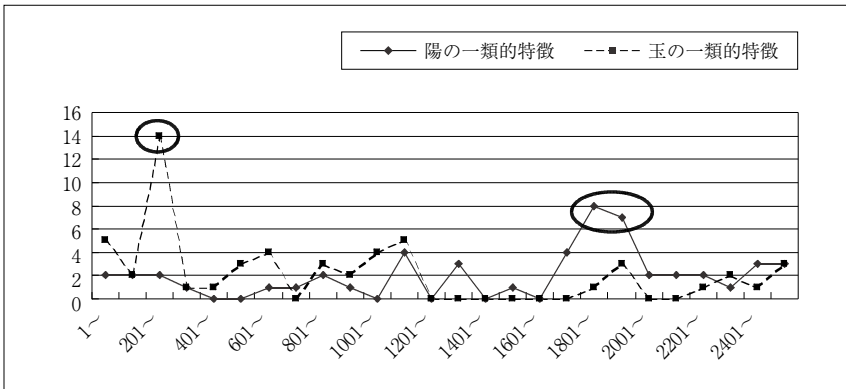


※グラフの横の数字は、空蟬巻の全語数2503を横にしたもの。目盛りは100語単位。縦の数字は当該語数。グラフ2で言えば、たとえば、1～100語までの間(空蟬巻の初めの方)に、陽明文庫本の独自異文は9語、玉里文庫本の独自異文は5語あるということになる。

グラフ2 独自異文



グラフ3 第1類の特徴



関係を見せるわけでもなく、特徴に規則性が見られるわけでもない。

他の諸本と比較すると、非常に近似した本文を有するにも関わらず、細かく見ると、差異が多く現れる本文。これはどのような書写態度から生ずるもののだろうか。

## 六 鎌倉期の『源氏物語』書写態度

ここで、他の文献における鎌倉期の『源氏物語』書写について見てみたい。『風葉和歌集』所引『源氏物語』本文については、米田明美が先行論を整理する形で「風葉和歌集」収掲の「源氏物語」本文に関しては、現存本にない菓守の巻の四首を含むこともあり、青表紙本・河内本いずれにも属さない別本系統の古写本の一本に依拠しているとされる<sup>(15)</sup>と述べる。

また、『物語二百番歌合』所引『源氏物語』本文については、安宅克己が「物語二百番歌合の源氏物語は河内本よりも青表紙本的な要素が強い別本である、と言うのが穏当なところであろう<sup>(16)</sup>」と述べ、さらに上野英二が「定家の注釈研究の集成である『奥入』」には、しばしば「不勘」、「未勘」などという書き込みが見られるが、それは、本文について「二説也」として、対立する両形を併記した姿勢と軌を一にするものであろう。定家にとっては、『源氏物語』は読むものであるとともに、研究の対象でもあったのである。定家に見られるこうした傾向を、より客観的、研究的であるとするならば、それとまったく対蹠的だとしなければならぬのは、『物語二百番歌合』に見られたような誤写の数々であった。

そこには文献学的な厳密さはなく、むしろ物語への親近の深さを看取ることが出来た。定家にあつては、研究してなお不審が残されたのに対し、ここでは誤写してなお、一点の疑念さえ抱かれなかった。本文の言語に対する意識が違ったのである。その傾向は和歌にかかわって著しく、『物語二百番歌合』というやや特殊な場合において顕著に伺えたが、それは『源氏物語』一般に敷衍し得ることであろう。『源氏物語』は必ずしも正確に読まれ、写されたのではなかった<sup>(17)</sup>と踏み込む。

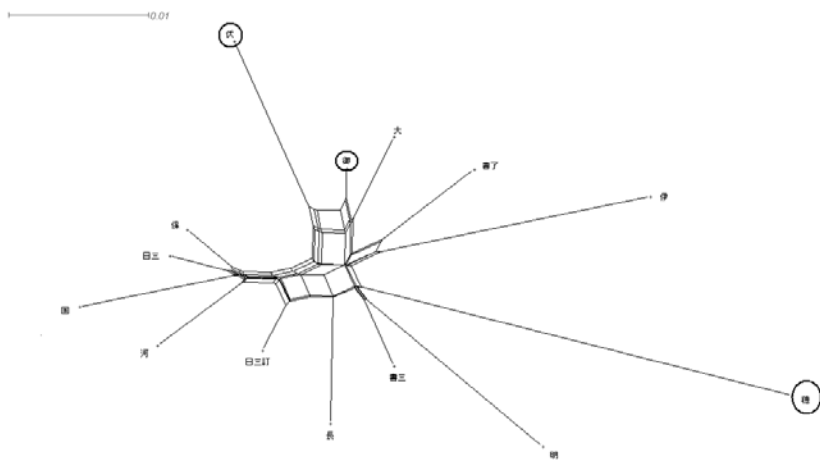
実際に、鎌倉期ごろ書写と推定される写本を見てみよう。図2は、空蟬巻第一類（<sup>(18)</sup>旧青表紙本系）を系統学のパログラムに掛けたもの。中心から離れるほど独自異文が多い。○を付けたのが鎌倉期書写かとされる諸本。「御」は東山御文庫蔵各筆源氏物語（勅封一・二・三）<sup>(19)</sup>。推定書写時期は鎌倉時代。伝承書写者は兼好法師（古筆了仲極め）とされる。「伏」は吉田幸一蔵伏見天皇本。推定書写時期は「永仁（一二九三―一二九八）頃<sup>(19)</sup>」。「穂」は穂久邇文庫蔵源氏物語。推定書写時期は「鎌倉時代末期から吉野時代にかかるところのもの」とされ、伝承書写者は後光厳院（一二三三―一二三七）<sup>(20)</sup>（古筆了任極め）とされる。「御」は中心近くに来るものの、「穂」「伏」はそれぞれ、中心から大きく離れ、独自異文が多いことが知られる。

## 七 おわりに

以上、第二類（<sup>(21)</sup>旧河内本系）、陽明文庫本、玉里文庫本を中心に考察した。第二類（<sup>(22)</sup>旧河内本系）と陽明文庫本・玉里文庫本は



図2 Neighbor-Net network (Bryant and Moulton 2004)



近似した本文を有しており、さらに、陽明文庫本と玉里文庫本は同一祖本を有すると考えられる。それにも関わらず、陽明文庫本と玉里文庫本を詳細に検討すると相当大きな差異があった。このような差異が「忠実な書写」とそれに伴う「誤写」のみに拠って現れるまでには相当な転写回数が必要であろうが、陽明文庫本も玉里文庫本も、他の諸本と比較すると特殊な本文であり、そこまですべて転写が繰り返された痕跡もない。そこで浮かんでくるのが、あまり厳密ではない、自由な書写態度である。

我々は、ともすると、作品成立時に近い写本(古い写本)ほど、作品成立時の面影を遺すと考えがちだが、実はそうとも言い切れないようである。

『古今和歌集』においては、「全巻残っている最古のもの」である元永本の本文については「古写本間の相違の多くは撰者たちの時代よりもかなり後に生じたと考えの方が妥当である」と言われている。ヨーロッパにおいてもその点に関しては同様の事情を抱えるようで、パピルス写本について L. D. レイノルズと N. G. ウイルソンは「調べればわかることだが、多くのテキスト伝承では最古の写本が最良写本である。しかしどうかつにこれを一般化するべきではないことを示す例外はいくつかある。(中略)パピルス写本は中世の写本よりも数百年古いものであるが、だからといって全体として著しくすぐれたテキストを示すというわけではなく、メナンドロスの『気むすかし屋』をふくむもつとも有名で重要なパピルス写本のひとつ (P. Bodmer4) にしても、驚くほどテキストが毀れてしまっているのである」と述べる<sup>(21)</sup>。

歌集の書写態度に関して考察した浅田徹は「和歌にあっては、平安時代の後半（12世紀前半ころ）に至るまで、厳密な正確さを追究した写本は作られていなかった。（中略）それに対して、平安末期頃（12世紀後半）にかけて、勅撰集などステータスの高い作品の書写では明らかに正確性が高まる」と述べる。

比較的早期に、書写の正確性が高まった勅撰集などの歌集の書写とは異なり、作り物語の書写においては、『住吉物語』や『狭衣物語』のように、後々まで、厳密でない書写、自由な書写が一般的であった。それが『今とりかへばや物語』や改作本『夜寝覚物語』などの改作・変奏へとつながる物語のエネルギーでもあり、物語本来の姿でもあったのだろう。

他の作り物語に比して厳密な書写が行われていた『源氏物語』においても、鎌倉期までは本文が流動的であったことが、定家の『尋求所々雖見合諸本猶狼藉未散不審』（『明月記』嘉祿元年（一二二五）二月十六日条）という言や、親行の「和語旧説真偽舛雜」（『風来寺藏』源氏物語・奥書）という言から知られる。また巢守卷などの存在や、巢守卷が『風葉和歌集』や『源氏物語系図』などに記載されていることから、本文だけではなく、巻数自体も流動的であったと知られる。

そのように流動的であった『源氏物語』本文だが、勅撰集と同様の事情（源氏物語の権威化）が、より遅れて『源氏物語』に訪れた結果、本文の固定化（証本作成）が必要になり、定家本・河内本などの証本が作成された。そして作り物語としては珍しい作者名の流布や、大部な物語であることなどと相俟って、他の作

り物語と比して厳密な書写が行われるようになったのであろう。

だが、『源氏物語』本文を固定化しようとして試みた定家においては、さえ、上野英一が指摘することく、『源氏物語』の書写態度には「文献学的な厳密さ」（本文書写・注作成）と「物語への親近の深さ」（『物語二百番歌合』作成）の二種類あった。

そして、今回考察した陽明文庫本・玉里文庫本など、別本の一グループは、『源氏物語』が権威化される以前の、（親本もしくは祖本に対して）あまり厳密ではなく、本文を固定化する意図を持たない書写態度を遺していると考えられよう。そう考えることで、他の鎌倉期書写と言われる諸本の独自異文の多さも理解できる。

そのような、（親本もしくは祖本に対して）厳密ではない、本文の流動性を支えるような書写を「書くことの喜び」と言ってしまうては単純に過ぎようが、そこには、「物語を作ることの喜び」に準じ、「物語を読むことの喜び」よりも、より積極的に物語世界に関与する、「物語を書写することの喜び」と言ったようなもの、物語の本来の姿が顕れているのではないだろうか。

また、別本諸本中に、鎌倉期から南北朝期にかけて流布していた一グループがあるということは、これから別本内の諸本分類を行う際の一つの指標となる。さらに、異同の比較的少ない『源氏物語』書写においても、時代やケースにより書写態度が異なる、という事実は、これから『源氏物語』諸本の伝流を探る際の、さまざまなヒントとなる。

注(1) 高橋英樹「能書の家」『和歌をひらく 第二巻 和歌が書かれる

とき』岩波書店 二〇〇五・一一

(2) 浅田徹「不違一字」的書写態度について』井上宗雄編『中世和歌 資料と論考』明治書院 一九九二・一〇

(3) 阿部秋生解説『陽明叢書国書篇 第十六輯 源氏物語 一』思文閣出版 一九七九・三

(4) 池田亀鑑『源氏物語大成』中央公論社 一九五三・六―一九五六・一

(5) 拙著『源氏物語の受容と生成』(武蔵野書院 二〇〇八・九) 第一巻 一部参照。

(6) 五島和代「河内本源氏物語と陽明文庫本」『北九州大学文学部紀要』三五 一九八五・八

(7) 伊東祐子「河内本『空蟬』巻の校訂過程」『学習院大学国語国文学会誌』二九号 一九八六・三

(8) 吉岡曠「河内本『桐壺』巻の校訂過程」『文学』一九八四・一、二『源氏物語の本文批判』笠間書院 一九九四・六再録

(9) なお、麦生本については「麦生本・阿里莫本が第二の場合(河内本成立以後の混成本文を有する伝本)であることはいうまでもない」(岡島偉久子「源氏物語阿里莫本―『源氏物語大成』不採用二十六帖について―」『ピブリア』九〇号 一九八八・五)と述べられている。

(10) 徳満澄雄「鹿児島大学付属図書館蔵玉里文庫本古筆源氏物語について」『語文研究』第二三号 一九六七・二

(11) 伊牟田経久「玉里文庫本『源氏物語』(二種)の本文―『空蟬』「関屋」の両帖について―」『国語国文 薩摩路』第二〇号 一九七六・三

(12) 諸本・図およびプログラムの詳細は、拙著『源氏物語の受容と生成』(武蔵野書院 二〇〇八・九) 第一部第三章参照。

(13) 桃園文庫本、飯島春敬本は原本および影印での確認ができなかったため、プログラムに掛けることや数値を出すことはしていない。

また異同は『源氏物語大成』に拠る。飯島春敬本は、他の三本(陽明、玉里、桃園)からは少し離れている観もある。飯島春敬本は池田和臣編・解説『飯島本 源氏物語』全十巻、笠間書院 二〇〇八・一二)として刊行予定。桃園文庫本は該当本を特定できず。

(14) 飯島春敬本の書写年次については、池田和臣が注(13)『飯島本源氏物語』パンフレットに「明石」巻の奥に「為和」とある。冷泉為和(一四八六―一五四九年)のことと思われる。実際「明石」巻の見返しに、「いたき所まさりてト云より為和卿」と付箋があり、四一丁ウラ四行目の上部に「是より為和卿」の付箋がある。その部分はみごとな定家流の筆跡であり、為和筆と見て良い。『源氏物語大成』には「鎌倉末期の書写であらう」とあったが、室町期の写本とすべきである」と述べる。

しかし、パンフレットの書誌を見る限りでも、料紙も一面行数も和歌の書式も巻によって異なる上、「須磨」巻は青表紙本、「初音」巻は河内本として『源氏物語大成』に校異が載せられることく、本文系統も混在するようであり、取り合わせ本かと疑われる。また、明石巻の書写にしても、全冊ではなく、四一丁ウラ四行目から書写者が明記され、書体が変わるというのは、少し不審で、補写など、何らかの事情が裏に想定される。明石巻の「為和」のみで、五十四帖をひとまとめに「室町期の写本であった」(パンフレット)と断言するのはためらわれる。空蟬巻については、今はひとまず、『源氏物語大成』や『源氏物語事典』の「鎌倉末期の書写か」という判断に拠った上で、存疑として扱う。

(15) 米田明美「風葉和歌集」桂切の新出「源氏物語」歌について―付「風葉和歌集」に用いられた「源氏物語」本文考察』『甲南国文』四七巻 二〇〇〇・三

(16) 安宅克己「青表紙本源氏物語成立以前の定家本」『学習院大学国語国文学会誌』二六号 一九八三・二

(17) 上野英二「源氏物語の享受と本文―物語二百番歌合所収本文をめぐって―」『国語国文』53 1 一九八四・一

- (18) 阿部秋生・秋山虔・池田利夫「東山御文庫藏源氏物語」(各筆源氏) 解題『東山御文庫藏源氏物語全揃』貴重本刊行会 一九八六・一  
二  
(19) 吉田幸一解説『源氏物語一(伏見天皇本)』古典文庫 一九九一・一  
一  
(20) 『日本古典文学影印叢刊 源氏物語』一・五 貴重本刊行会 一九七九・二〇、一九八〇・二  
(21) 小沢正夫「古今和歌集」『和歌大辞典』明治書院 一九八六・三  
(22) L. D. レイノルズ/N. G. ウィルソン著 西村賀子・吉武純夫訳『古典の継承者たち―ギリシア・ラテン語テキストの伝承にみ

る文化史』国文社 一九九六・三  
(23) 浅田徹「古今和歌集―定家と書写」『文字の力 國文學8月臨時増刊号』二〇〇七・八

(24) 菓守巻については久保木秀夫『源氏物語 菓守巻関連資料再考』(『平安文学の新研究―物語絵と古筆切を考える』新典社 二〇〇六・九) 参照。  
(25) 近年の論では、大内英範がハーバード大学美術館本蜻蛉巻と陽明本・保坂本との親近性を指摘している(『ハーバード大学美術館本蜻蛉巻とその本文』『国文学論叢』28 二〇〇七・三)。

## 新刊紹介

新美哲彦著

### 『源氏物語の受容と生成』

本書は、第一部「源氏物語」本文系統の再構築、第二部「源氏物語」の本文世界、第三部「源氏物語」の享受、及び資料編により構成される。第一部では、従来の諸本分類の問題点を整理し、「青表紙

本系」「河内本系」という名称の「第一類」「第二類」への変更を提案する。更に生物系統学で使用されるプログラムを援用して諸本を分類、本文系統再構築の具体的方法を示す。第二部では、本文の差異がもたらす物語内容の変化から、各本文の特徴を明らかにする。第三部では、古注釈書の作成方法の変化、秘伝化、あるいは書物の形態に着目し、生成の場所・時代における『源氏物語』の価値、並びに写本に付与された

価値等について論じる。論は中近世における写本制作等の享受の実態にも及ぶ。資料編では享受に関わる貴重な資料を翻刻する。本書の成果により、『源氏物語』の本文研究・享受研究は新たな段階へと進んだ。必読の一冊である。

(二〇〇八年九月 武威野書院 A5判 四一八頁 税込二二六〇〇円)

〔山中悠希〕